

津久井やまゆり園事件について その7

この事件について寄せられた意見・感想です。ぜひ最後までお読みください。そしてご意見をお聞かせください。

1) AIさん

「やまゆりもオウムも、私のこととして」

「心を失っている」として障害者19人を殺害した植松被告は「家族を苦悩から救うために」という使命感を抱いたそうですが、殺人は絶対に許されなくても、彼の闇は私にもある…と事件直後に感じました。これは彼個人の闇ではなく、もしかしたら集合無意識の闇ではないか？…と。だから、二年目にして向き合えた「やまゆり学園」追悼。

今日は「津久井やまゆり園事件が私達に問いかけるもの」というフォーラムに参加。障害者が生きる世界に触れてきました…というか、この視点こそスクラッチ*だよ！ 障害者を弱者としてる自分に何度も気づき落ち込む三時間。

支援者当事者の話を聞くうちに、何が普通で？ 何が障害なの？…と線が薄くなっていく不思議な感覚。だって私もある意味不完全。誰もが不完全。高齢になれば私も介護が必要。そのとき「生産性ないから生きてる資格がない」と言われたら、どんな気持ちになるのだろう。

「心を失っている」として19人を殺害した植松被告は、絶対にしてはならない罪をおかしましたが、彼のなかにある「世の中を救済する」は私にもある願いです。この感覚はオウム事件で死刑執行された方々と同じ。

彼らと私をスクラッチする線はあるのだろうか？ 人を殺すこと、人の命を尊重することの間にスクラッチすること。あちら側に行った人と私。そんな線引きで、再発は防げるのだろうか？ ご遺族の痛みは回復されるのだろうか？…この問いは「世界のため」を生きる自分が問い続ける責任を感じました。オウムもやまゆりも私のなかで生き続け、問い続け、被害者のご冥福を祈り続ける事件です。

自分と向き合う時間でもありましたが、私の知らないことを知れたありがたい時間でもありました。障害者が地域社会で普通に生活するノーマライゼーションの世界が始まっていること（私は施設にいるほうが幸せだと勘違いしてた）彼らにも確かに意志はあること。「誰かの役にたたい！」…秘教学でいう「魂とのつながり」は、彼らにも起こること。知るって大切ですね。主催された方々の日頃からの努力と積み重ねに敬意を感じます。

最後に…一番嬉しかったのは、二年目の追悼ですが、昨年よりも現地や26日追悼式の参加者は増加したそうです。悲しみの大きさが多様性への目覚めを加速させるのでしょうか。愛と希望はある！名もなき被害者の方々が報われる日がきますように。心からご冥福を祈ります。（AIさんは関東在住の方で7月の東京での「考え続ける集会」に参加した時の感想です。）

*スクラッチ：人と人との間に線引きをすること Schrach